

子どものコミュニケーション力を高める授業づくり

～新聞を活用して考えを深め発信する子どもの育成～

新潟市立東山の下小学校

1 NIE 実践のねらい

(1) コミュニケーション力を高める

当校の重点目標は「コミュニケーション力の育成」である。コミュニケーション力を高める授業の在り方や活動・場の工夫の仕方について、学校教育全体の活動や授業実践を通して探る。実践・研究委嘱を受けた3年間を通して、次の3つの成長を目指してNIE実践（以下、「新聞活用学習」という。）を行う。

<児童の成長>

◎ 新聞を読むことが好きになり、文章を読み取る力、必要感をもって情報を収集したり話し合ったりする力、工夫して発信する力等のコミュニケーション力が高まる。

<教師の成長>

◎ 新聞の特性や新聞を活用した学習への理解を深め、児童のコミュニケーション力を高める授業設計力や授業力、学校全体の言語環境をデザインする力が高まる。

<地域とのつながりの成長>

◎ 新聞活用学習を通して地域の歴史や成り立ちを知り、地域の人々と協力して安心・安全な生活を築いたり、自然環境を守る取り組みを行ったりし、地域とつながる力が高まる。

(2) 話し合う力を高める

今年度の校内研究のテーマは「児童の『話し合う力』を育成する」であり、6つの指導過程と4つの指導事項で構成した「東山の下小『これだけ』メソッド」を設定し、授業改善に取り組んでいる。この「メソッド」に基づいた授業において新聞を効果的に活用する。

6つの指導過程とは「課題」「考え1」「発表」「話し合い」「考え2」「なるほどノート」のことである。この過程で児童は、他者の考えに触れることを通して自分の考えとの共通点や相違点に気付いたり、よりよい考えはどれかを話し合ったりする。新聞記事を含む多様な考えに出会いながら、自他の意見を比較することで自分の考えが深まることを目指す。4つの指導事項とは「板書これだけ」「ノートこれだけ」「発言これだけ」「ハンドサインこれだけ」のことである。

新聞を効果的に活用するとは、「どの記事を」「どのように教材化し」「指導過程のどの場面で」「どのように」活用すれば、学習意欲や課題意識を喚起・醸成し、「話し合い」が活性化し、学習課題がよりよく解決されるかを考えて新聞を用いることである。また、板書を構成する要素として新聞の提示の仕方を工夫することである。

2 実践の概要

(1) 地域とのつながりを紡ぐ授業実践

<学年・教科・単元名> 1年 生活科「むかしからのあそびにちょうせん」

<これだけメソッドでの新聞活用の実際> 「なるほど」で新聞制作学習

昔の遊びの達人である地域のお年寄りや保護者をお招きし、10種類の遊びを楽しんだ。その後、遊びのコツや楽しみ方など、教えてもらったことを一人一人が「なるほど」としてまとめた。それを基に、学んだことや楽しかったことをグループごとに新聞(写真と文)にまとめる活動を行い、お礼の気持ちを込めてお年寄りにプレゼントした。

<成果>

「これで喜んでくれるかな？」と記事の内容について相談し、相手に喜んでもらえるような表現を考えたり写真を選び直したりした。新聞を受け取ったお年寄りからは、「子どもたちから元気もらった。新聞を読んで楽しかった時間を思い出す事ができて嬉しい。」と子どもたちと触れ合うことのやりがいを感じていただくことができた。



<学年・教科・単元> 2年 生活科「町のすてき大はっけん」

<これだけメソッドでの新聞活用の実際> 「課題」で新聞機能学習

町探検をして発見したことを、一人一人が「なるほど」としてカードにまとめた後、探検したお店ごとに「自分たちが発見したお店のすごいところ」を新聞にまとめ、お店に届けた。新聞づくりでは、実際の新聞のいろいろな見出しからよさを見つけ、「すごいところ」が一目で分かる見出しになるよう工夫させるようにした。

<成果>

実際に聞いたり見たりすることで、今まで気付かなかったことを知り、新鮮な目でお店の「すごいところ」をとらえて記事にした。見出しの書き方を学習したことで、「すごいところ」が一目で分かる見出しを付ける事ができ、お客さんへのアピールになると、お店の方が喜んでくださった。その姿を見て児童は地域への愛着を深めた。



<学年・教科・単元名> 3年 総合「地域の宝じゅんさい池を守ろう」

<これだけメソッドでの新聞活用の実際> 「話し合い」で新聞活用学習

地域のじゅんさい池を調べるフィールドワークを行った後、池の豊かな自然が外来種の影響でバランスを崩してきていることを確認するため、「話し合い」において外来種についての新聞記事を活用した。今まで鑑賞してきた動植物の中には、自然の生態系を崩すものがあるということへの驚きと疑問を引き出すことを目的とした。

<成果>

新聞の活用が、外来種について具体的により深く知ることにつながり、その影響を自分たちの身近な問題としてとらえることができた。そして、池の自然を守ろうとする意識がより一層高まった。自分たちに出来ることは何かを意欲的に考え、家族や地域の方々に思いを伝えるとともに協力を呼びかける活動へ発展させた。



<学年・教科・単元名> 4年 総合「バリアフリーの実現に向けて」

<これだけメソッドでの新聞活用の実際> 「話し合い」で新聞活用学習

デイサービスセンターで高齢者と交流する事前学習の、「どんな接し方やどんな活動をすればよいか」を解決する「話し合い」で活用した。社会で活躍する高齢者の記事を自分たちで探して複数読むことで、高齢者に対して抱いている「弱者」のイメージを転換し、一人の人として尊敬して接することの重要性に気付かせることを目的とした。

<成果>

記事検索を基に話し合い、「何かをしてあげる」「お世話をする」という立場で訪問活動をするのではなく、「できることは自分でしてもらおう」「一人一人に合った活動や言葉かけを工夫する」そのために「視線を合わせてゆっくりできる活動をすればよい」「複数の活動を準備して状況に合わせて対応する」という接し方をまとめることができた。



<学年・教科・単元名> 5年 総合「通船川プロジェクト」

<これだけメソッドでの新聞活用の実際> 「課題」で新聞活用学習

学校のすぐ側を流れている通船川の歴史について調べる学習の、「課題」において活用した。普段、子どもたちが目にしている通船川の印象とは異なる印象で採り上げられている記事を提示することにより、既存の知識だけでなく、新しい調べの視点に気付かせ、探究意欲を高めることを目的とした。

<成果>

授業中に漂ってくる臭いや、通船川沿いの散策で目にした川の様子から、子どもたちにとっては「汚れている」「臭い」といった印象の強い通船川。しかし、教師が提示した新聞記事の見出しを目にし、自分たちの知らない通船川の歴史があることに気付き、記事の内容を読みたい、もっと知りたいと探究意欲につなげることができた。



<学年・教科・単元名> 6年 総合「ザ・プロフェッショナル」

<これだけメソッドでの新聞活用の実際> 「話し合い」で新聞活用学習

様々な職業の方の話を聞いた後、「多くの職業に共通していることはどんなことか」を解決する「話し合い」で活用した。ゲストティーチャーの話と共に働くことに関する新聞記事の内容を読み取り、話し合うことで、それぞれの職業に共通する仕事の大変さ・やりがいなどに気付かせることを目的とした。

<成果>

様々な職業に就いている地域の方の話だけでなく、新聞記事を読み取ることで、多くの職業に共通している「仕事は大変だが、お客さんに感謝されたときにやりがいを感じる。」など、仕事の大変さ・やりがいなどに気付くことができた。新たな見方を獲得したり、働くことの意義を考えたりする契機となった。



(2) 「話し合う力」に焦点付けた実践

学年・教科・単元	「これだけメソッド」での新聞活用	新聞活用の効果
1年 国語 「新聞よめるかな」	「話し合い」で、新聞全体から知っている言葉を集めさせた。	自分も新聞が読めることに気付き「なるほど」に書いた。
1年 学級活動 「安全な暮らし」	「課題」で、交通事故の記事(写真)を見せ、記事の内容を説明した。	交通事故を身近に感じ、事故防止の「話し合い」が活性化した。
2年 国語 「かたかな」	「課題」で、新聞記事から片仮名の言葉を集めさせた。	片仮名で書く言葉がたくさんある事を知って喜び「なるほど」に書いた。
2年 生活 「おもちゃづくり」	「課題」で、「よくとぶ飛行機」など作り方が書かれている記事を提示した。	「つくりたいおもちゃのイメージを明確にして「考え1」を書いた。
3年 音楽 「おはやしづくり」	「課題」で、各地の祭りのにぎやかな様子を紹介した記事を提示した。	どんな祭りの様子を表現したいかイメージして「考え1」を書いた。
3年 総合 「ワールドタイム」	「課題」で、取り上げる国についてスクラップ記事から情報を集めさせた。	既知の情報の多少に関わらず本時で得た情報を「考え1」に書いた。
4年 国語 「私の考えたこと」	「話し合い」で、投書を基に文章構成の効果について意見を交換させた。	意見を明確に伝えるために総括型がよいことを「考え2」に書いた。
4年 社会 「新潟の歴史」	「話し合い」で、開港150周年のイベントの記事を紹介した。	港町として発展した歴史を今とつなげて捉え直し「考え2」を書いた。
5年 算数 「割合とグラフ」	「なるほど」で、身近な事柄のランキング記事を提示しグラフ化させた。	記事に興味をもつと共にグラフの完成形のイメージをもって表した。
5年 理科 「天気の変化」	「課題」で、接近中の台風の進路を予想できる記事や天気図を提示した。	複数の情報を整理して今後の進路予想を「考え1」に書いた。
6年 国語 「投書を読み比べよう」	「話し合い」で、複数の投書の意見の内容や述べ方を比較検討させた。	話題に関する考えを再構成し、述べ方を工夫して「考え2」を書いた。
6年 道徳 「情報との付き合い方」	「課題」で、ネット依存に関わる記事や投書を提示した。	ネット依存の危険性を自分ごととしてとらえ「考え1」を書いた。

(3) 日常的に新聞に親しむことを目的とした実践

① 「なるほど」読み

記事の読み聞かせを聞いたり自力で読んだりする際に、「なるほど」と思った所に鉛筆でラインを引く。その後「なるほど」ベスト3に青いライン、さらにベスト1に赤いラインを引いて、発表したりノートに書き取ったりする活動を行った。中学年以上は、写真・図表等も対象としたり、ラインを引く観点を指示したりすることもあった。

② 新聞を活用した情報活用の日常化

新聞の即時性を生かして、学習や生活に関連して教師が伝えたいことやクラスの子どもの興味・関心に合わせて記事を紹介した。

③ 新聞閲覧コーナーの焦点化

図書館にコーナーを設置し、司書が学習や生活に関連したおすすめの記事を、子どもの閲覧のしやすさを考えて展示した。



3 実践例 4年 総合的な学習の時間 「プラごみ どう減らす」

(1) これまでの実践の課題と目指す授業像

4年生の総合学習では例年、環境問題を採り上げ、問題の概要や在所、問題の解決に向けた社会の動向を調べる際に、新聞を活用してきた。また、単元のゴールに新聞を制作して発信する活動を設定することで、長時間に渡る調べ学習や話し合いに対する児童のモチベーションの維持に努めてきた。さらに、学習に協力してくださった地域の方々への信頼を深めることに成功してきた。

しかしながら、学習のねらいにあった適切な新聞記事の発見や教材化など、ゼロベースからの単元開発は容易ではなかった。そのため、新聞を活用することで学習への興味・関心を喚起し高めることができて、その後に、ア教師が「話し合う力」の育成に向けて新聞活用学習のよさを生かしきれない実態や、イ児童の主体的な新聞活用や課題解決につながらない実態があった。また、学習のまとめとして新聞の制作と発信をもって単元が終了し、ウ発信したことによる課題解決の成果を確認することがない実態があり、これらの実態を改善する必要がある。さらに、長年に渡り活動に関わってくださる地域の方から、エ「学校の継続した取組としての発展があるとよい」というご指摘をいただくこともあった。

このことから、今年度、本単元の実施に当たっては次の授業像を設定した。

ア「教師が新聞活用学習のよさを生かしきり」イ「児童の主体的な新聞活用や課題解決を促し」ウ「発信とその成果の確認があり」エ「結果として取組が継続・発展する」授業

これを新聞活用学習の過程に置き換えると次のようになる。

ア教師と児童が協働して「新聞記事を基に学習課題をつくり」イ「新聞記事を用いながら課題解決を図り」ウ「新聞記事を用いて発信や学習成果の確認をし」エ「結果として新聞活用学習が継続・発展する」授業

(2) 本単元で目指す授業像を具現するための方策（単元の構想）

上記の実態を改善し目指す授業像を実現する方策として、単元と新聞活用学習の過程を次のように構想して実践に取り組んだ。

- 今後数年に渡って世の中の動きと結びつけて学習を継続・発展させることが可能な環境問題を対象とし、児童の身近な生活の中に問題が存在し、その問題の解決に向け継続して新聞を活用する必要感がもてるテーマに焦点を当てる。
 - 世界的な問題であるプラごみの削減を対象として選定し情報を継続して収集
 - 地域と家庭での取組が可能なレジ袋削減に焦点化して実践
- 学習を進めて得た答えやまとめが、世の中とどのように結びついているかを確認したり考えたりするために新聞記事を活用する。
 - 専門家の見解や投書欄の意見への着目
 - 新聞を情報発信のツールとして活用
- 発信後の成果を確認するための取組を単元のねらいに設定
 - 実態調査やアンケートの活用

(3) 授業の実際

① 単元のねらい

- プラスチックごみについて、新聞記事から事実や現状・問題を見つけて、自分たちがごみの削減にどのように関わることができるのかを追究し実践していこうとする。
- 見つけた事実や現状・問題点について情報を収集・整理し、友達の意見と比較したり実践の難易度や効果を話し合ったりしながら、よりよい取組について考えることができる。
- 考えたことを自分で実践したり、相手や目的を明確にして事実や現状・問題、実践して欲しいことを発信したりすることができる。
- 発信後の効果に関心を持ち、循環型社会の実現という視点から、よりよいライフスタイルについて提案することができる。

② 単元における新聞活用の実際と成果

ア「新聞記事を基に学習課題をつくり」

<単元全体の課題を設定するために活用>

単元の導入で、記事「有料レジ袋義務化検討を」(新潟日報 H30.10.6)を活用した。社会科で「ごみの行方」を学習した児童は、国内にとどまらず世界でプラスチックごみ削減に向けての動きが活発になっている情勢を知り「プラスチックごみをどう減らしていけばよいのか」という単元全体の学習課題を設定した。

イ「新聞記事を用いながら課題解決を図り」

<考えや話し合いのベースとなる情報の収集・共有化を図るために活用>

続いて、児童が自分の考えをもって話し合いに参加するために必要な、一定量の情報の確保とその共有化を図ることをねらって、特集記事「プラごみ どう減らす」(新潟日報 fumufumu J:中学生以上 10代向けの新聞 H30.10.28)を活用した。ここで児童は、プラスチックごみに関するより詳しい情勢について知り、その中で「レジ袋」「プラスチックストロー」「ペットボトル」に焦点を当て「なぜ問題なのか」を話し合った。また、それぞれに固有の問題や解決方法があることを知った児童は、自分たちの力で解決に向けた取組ができるのは「レジ袋の削減ではないか」と単元の見通しをもった。

<実践を方向付け、維持しながら考えを深め発信方法の工夫を促すために活用>

学習の対象を明確にし、単元の見通しをもった児童は、進んで新聞記事に関心を寄せるようになり、教師が提供する記事だけでなく、家庭から新聞を持ち寄ったり、インターネットを活用して関連する情報を入手したりするようになった。この活用により、個々の児童の問題意識に基づいた多様な情報が寄せられるようになった。こうして児童は、情報の取捨選択や関連付けを行い、次第に、自分たちの実践の限界や新たな可能性について気づき、話し合いを通して考えを深めていった。

話し合いからは、地域社会への情報発信・協力要請への必要感が生まれた。これはまた、新聞記事の見出しの立て方や効果的な写真の在り方など、自分たちが発信する際に参考となる情報への着目、発信に向けての意欲向上につながった。新聞活用に端を発するこれらの取組が原動力となり、児童は、自分たちのレジ袋削減への取組を確かなものにして30時間に及ぶ課題解決の実践に取り組んだ。

ウ「新聞記事を用いて発信や学習成果の確認をし」

＜発信する内容の正確性をより確かなものにするために調査や話し合いで活用＞

児童は、単元の早い時期から、新聞に掲載された新潟県民の「マイバックの持参率」に着目し、「この数値を活用して自分たちの家庭や地域への呼びかけを行うとよい」ことに気が付いた。教師は、「呼びかけの前後でアンケートを実施し、その数値を比較することで、自分たちの情報発信や呼びかけの効果を確かめてはどうか」と提案した。アンケート実施後の集計結果から、県民より自分たちの家族の「マイバック持参率」が低いことを突き止めた児童は、自校の取組を強化する必要を感じ、どんな内容をどんなツールで伝えれば「マイバックの持参率」の向上につながるかを決める話し合いを行った。決定事項に従ってプレゼンテーションのシナリオ作成に入った児童は、その過程で収集した新聞記事を繰り返し活用して「自分たちが伝えようとしている内容が正確」であることの確認に注意を払った。



エ「結果として教師と児童による新聞活用学習が継続・発展する」

＜多様な発信ツールの特徴を捉えて効果について認識を深めるために新聞を活用＞

新聞活用学習を通して児童は、新聞の機能面からのよさや限界に気付いており、発信の目的や場に合わせてより効果を発揮するツールを選択する必要があることを話し合った。その後児童は、以下の4つのツールを活用して発信の準備を進めた。

- ・ 保護者を対象とした学習参観では、ストーリー仕立ての紙芝居で発信
- ・ 地域に呼びかけの範囲を広げるために、情報を精選して新聞で発信
- ・ レジ袋を扱うスーパーで取組の周知を狙って、人目を引くポスターで発信
- ・ 区役所などで活動のサポーターを増やすために、写真を多用してパネルで発信

③ 本単元で特に有効だった新聞活用

- ・ 単元の導入で新潟日報 **fumufumu J** の特集記事を活用したことは、児童の情報量の確保や課題の共有の促進に効果があった。単元のスタートで児童の既習を揃えることは、児童のモチベーションの維持に役立った。
- ・ 記事の内容理解には個人差があるので、同じ記事を繰り返し活用させる事で対応する。活用した記事はいつでも振り返る事ができるように各自のポートフォリオにストックさせる。

4 おわりに

今年度の新聞活用学習により、児童は文章を読み取る力、必要感をもって情報を収集したり話し合ったりする力、工夫して発信する力などのコミュニケーション力を高めた。これらの力の育成に寄与する記事の発見に向けて教師は、広く新聞に目を通したり、チームで情報を共有したりするよう努めた。今後児童が進んで新聞を手に取り、記事を読んで考えたり話し合ったりして社会とつながろうとする習慣を身に付けるためには、新聞を読む必要感や発信の必要性を実感できる単元の開発が必須である。「これだけメソッド」内での効果的な新聞活用と合わせて、研究を続けていきたい。